



理事長挨拶 “Change”

佐藤 正美

(東京慈恵会医科大学)

2009年1月米国大統領に就任したバラク・オバマ氏は、「Change」と「Yes We Can!」をスローガンに掲げて人々の心をつかむ演説を披露しました。非常に印象的な言葉でした。オバマ氏が唱えた「Change」は“変革”と訳するのが適切なようです。変革とは『物事を根底から新しく変化させること』を意味します。そのほか『別の状態に変わる』『違ったものに変える』という意味もあります。昨年2022年の定期総会で理事長を拝命されてから、私がすべきことと意識してきたのは「変化」でした。9月18日の理事会で、将来構想委員会の発足が承認されました。

本学会は、1991年に前身である「看護診断研究会」の発足を経て、4年後に設立されました。日本看護診断学会は特に、共通用語として「NANDA-I看護診断」の普及に大きな役割を担ってきました。その活動の影響が大きかったために、看護診断＝「NANDA-I看護診断」と誤って認識されてしまったようです。日本看護診断学会では、看護アセスメントに基づき「看護を必要とする現象」を特定し表すだけでなく、看護介入や看護による成果も含めた看護過程すべてについて取り組むことを目的としています。本学会が目指していることを、正しく伝えられるように発信するアクションに「変化」が必

要です。学会名称そのものを議論することも必要である、と考えています。

日本の医療提供体制は、病院で完結せず地域全体で支える方向に大きく変化してきました。「ときどき入院、ほぼ在宅」という在宅生活を基盤とする「地域包括ケアシステム」の構築が推進されています。入院期間はますます短縮され、入院患者はめまぐるしく入れ替わりクリニカルパスで治療やケアが進められています。そして、さまざまな専門職が治療やケアに関わる、それが現在の医療の体制です。その中で「看護診断ならびに介入・成果」すなわち看護過程はどのような意味をもつのでしょうか。医療やケアを受ける患者そして市民へ向けて、看護学の知識を持って判断し介入する必要性があることは論じるまでもないことです。しかし、本学会が発足した当時とは、患者背景および治療や医療体制は大きく変化し看護師を取り巻く環境も全く異なります。したがって、本学会の目的を果たすためには、学会設立当初に設定された活動の枠組みを見直し、変えていくことが必要不可欠です。

理事会では、今後の学会活動の充実と活性化に役立てることを目的に、学会活動に対する会員のニーズを把握するため、本学会全会員を対象にニード調査を実施しました。ご協力ありがとうございました。本調査の結果は、2024年3月に発行される日本看護診断学会誌（29巻1号）で報告いたします。皆様からいただいた貴重な意見を基に、メールによる会員への情報配信、研修会の企画・実施、学会Webサイトのリニューアルなど、2024年は様々な「変化」を起こしていきます。学会活動へのご要望やご意見などありましたら、いつでも事務局までご連絡ください。



第30回 日本看護診断学会学術大会のご案内

【大会テーマ】

豊かな援助を導く看護診断の未来

大会長 笠岡 和子 (関西看護医療大学)

来る2024年7月27日(土)・28日(日)に、神戸市(神戸国際会議場)で第30回日本看護診断学会学術大会を開催いたします。コロナ対応が2類から5類に変わりましたが、パンデミックを経験して学会等の参加への認識も変化しているように感じています。対面での開催が当たり前のこととして実施できる状況にはまだまだ

達していないのかもしれませんが、今回も前回第29回の学術大会同様、皆様のご参加を得てしっかりと意見を交わしていきたいと、対面での実施方向で進めております。

今回の学術大会は第30回という節目になります。これまでの学術大会のテーマをみますと「アセスメント」

「ケアに活かす」「看護介入」「実践」等のキーワードが何度も出てきます。看護診断とは、看護思考過程の中の私達看護師が臨床で治療できる問題として立案し援助に繋げていけるものです。これらのキーワードは、特別な言葉ではなく、看護診断にとってはなくてはならないキーワードです。そのため理想ではなく、適切な「アセスメント能力」「看護介入技術」を持ち、患者の反応を適切に捉え・判断して、実践に繋げていくことが「患者に必要な看護」に繋がるのだと考えています。看護の役割とは何だろうとあらためて看護のこれから(未来)を思う時、大事にそして早急に育てていくべき能力ではないでしょうか。

第30回学術大会では、このような看護の状況を踏まえ、教育講演では、南 裕子先生をお招きし「看護の未来」について広い視点からご講演いただきます。医療現場で日々叫ばれているタスクシフトの観点からも、看護が果たさなければならない責任や期待されている役割について、ご講演いただけるものと思います。他の教育講演では、小児看護学会、看護科学学会より、それぞれ用語検討に携わってこられた先生方にご登壇いただき、看護が力を発揮すべき「看護現象」と「看護用語」についてご

講演いただきます。ご登壇の先生方とフロアの皆様方と、広く意見交換したいと考えています。今までは別々に活動を展開してきた看護の各学会ですが、相互に意見交換し、それぞれが蓄積してきた「看護の知」を集約してさらに前進させていくべき時期がきているのではないのでしょうか。さらに「看護診断を下しても、看護介入の方法が見えないから、ラベル付けをただけになる」と囁かれ、看護診断離れが危惧されるところです。本学会では、看護診断に対する「看護介入技術」にも焦点を当て、看護技術学会で今まさに研究を進められている先生方にご登壇いただき、研究によりエビデンスが明確になった「看護介入技術」を紹介していただくことも企画しました。

今回のこのプログラムが、そのような看護の発展のきっかけになることを願っています。

このように、本大会にご参加いただければ、日々目にする看護現象が少し違って見えてきて、明日からのあなたの看護が一步進んだものになる……そんな学術大会にしたいと、日々準備を進めています。皆様のご発表・ご参加を心よりお待ちしております。

第29回 日本看護診断学会学術大会を終えて



第29回日本看護診断学会学術大会 大会長 村田 節子 (第一薬科大学)

COVID-19は第5類に移行しましたが医療機関では依然と厳しい感染対策が続いており、我々の健康を守るために日々奮闘されている医療従事者や関係各位の皆様にご敬意を表します。

この度、第29回日本看護診断学会学術大会「いま改めて看護師の仕事発信しよう～看護師の臨床判断を伝える 生活者に、他(多)職者に、地域に～」を2023年7月1～2日に、しばらくWEB開催でしたので何とか対面でお願い開催いたしました。

医療は「患者」という立場になった「生活者」が自分らしく生活に戻って行けるように支援するシステムです。初日の特別講演では生活者の立場から「生涯現役者の博多祇園山笠—健康バロメーターとしての祭り—」を博多町家ふるさと館館長で漫画家の長谷川法世先生にご講演いただきました。町に根付いた祭りとその意味などユーモラスにお話しいただきました。折しも博多祇園山笠の初日、山笠の法被姿でご登壇いただきました。そのお話を聞き、村田久行先生(NPO法人対人援助/スピ

リチュアルケア研究会)に「臨床での看護師の『判断』をささえるもの」をご講演いただき「判断」や「援助」について示唆に富むお話を伺いました。二つの講演を受け、シンポジウムⅠ「臨床から在宅へ『看護の臨床判断』をつなぐ」では、中野由美子先生(聖隷淡路病院)に看護管理者の視点で「地域に看護のつながりを創る(臨床の看護判断を在宅につなぐ)」を、岩崎玲奈先生(九州労災病院)にはがん看護専門看護師の立場から「急性期病院での臨床判断を地域につなぐ」を、そして今丸満美先生(訪問看護ステーション エルム管理者)には在宅の立場から「臨床から在宅へ」を、笠岡和子先生(関西看護医療大学)には教育の立場から「臨床実習での学生の判断を在宅につなぐ」をご講演いただきました。

ところで、看護の問題は常に看護診断になるものではありません。2日目のシンポジウムⅡは「診断しにくい領域・他職種との協働が必要な看護問題に取り組む看護の臨床判断」をテーマに、精神領域から安藤満代先生(西九州大学)に「地域で就労継続支援施設を利用する精神障害者に関する一考察～看護と福祉と社会～」を、手術室看護の立場から内田荘平先生(福岡看護大学)に「周術期管理部門の設置に伴う新たな手術看護業務から看護

独自の問題を探る」をご講演いただきました。看護職者は健康プランナーとして「患者」となった人を支える役割を持っています。そのために、思考し判断しケアしていますが、今後そこでの「判断」やその判断の「記録」をどのように実施して行けば良いのか2日間でたくさんの課題も見えました。

さらに特別講演として、日本の看護診断の発展に多大な貢献をされてきた中木高夫先生（看護診断学会名誉会員）に「フェミニスト看護宣言」をご講演いただきました。教育講演では、吉岡さおり先生（京都府立医科大学）に「看護師のリカレント教育の実践とその意義」、黒江ゆり子先生（関西看護医療大学）に「看護学的視点で思索する“生活者”と“病みの軌跡”」をお話しいただきました。

理事長特別企画では「『看護実践を表す・記録する』看護実践の表し方を見つめる～看護診断の今未来を考える～」をテーマに第一部「臨床現場の看護問題の表現や記録の実情について」では、石川ふみよ先生（上智大学）、

吉江悟先生（一般財団お浜システムジャパン）に、第二部「臨床現場の教育の実情」では、長家智子先生（第一薬科大学）、本田裕美先生（東京医科大学病院）にご講演いただきました。さらに理事や会員のご協力で事例セッション、交流集会、共催セミナーを開催できました。しかし、一般演題がポスターと口演含めて7題と少なく、有意義なご講演のオンデマンド配信も費用の面で断念せざるを得ませんでした。様々な要因で協賛を得ることが難しく来場者数も伸びず次回への大きな課題も残りました。

そのような中、叱咤激励しながら支えていただいた長家実行委員長はじめ実行・企画委員の皆様や事務局に心から感謝申し上げます。またHP作成ははじめ多大なご支援をいただいた山口大学の山勢博彰先生には特に感謝申し上げます。そして、このような機会を与えていただきました日本看護診断学会理事長並びに理事の皆様、会員の皆様に深く感謝申し上げます。皆様のご健勝ご発展を祈念申し上げます。

第29回 日本看護診断学会学術大会に参加して

福岡大学医学部看護学科 櫛 直美

去る2023年7月1日・2日に開催された学術大会は待ちに待った対面での開催でした。同じ空間で互いに顔の見える距離で語り合い、ディスカッションできることの喜びをあらためて感じることができ、本大会は学術的意義のみならず人と人とが関わり合うことの大切さについても意味をもたらしたと思います。私の記憶に残る心温まる大会であり、僭越ながら一言感想を述べさせていただきます。

さて、本大会のテーマである、看護師の臨床判断を生活者や地域に伝えていく意義について、まずは大会長の村田節子先生より講演がありました。看護診断については難しく捉えがちですが、実は多様で個別性の高い看護ケアの思考の整理と発信に活用の意義があることを実にわかりやすく説明いただきました。おそらく多くの学生が参加していた本大会において、これからの看護を担う

若者への温かいメッセージだと受け取りました。またシンポジウムでは臨床現場や在宅、地域などの多様な看護の場から、退院後も医療的管理を必要とする患者を生活者の視点で捉え、切れ目のない医療や介護の重要性とそれを支える看護師の役割や組織のあり方について具体的にお話しいただきました。プレゼンも工夫されイメージがしやすく学生が熱心に聞き入っており、学生からの質疑応答にも大変感心しました。大袈裟かもしれませんが、日本の看護の未来に希望が持てた感じがいたしました。

梅雨の終わりの大雨の中での開催でしたが、スタッフも参加者も皆が温かい気持ちで本大会の幕を閉じたことだと思います。ここに至るまでの準備にご苦労されました大会長はじめ関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

第29回 日本看護診断学会学術大会に参加して

地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立墨東病院 小野寺 恵子

看護師の臨床判断は、意図的に記録し、語ることで可視化できると日々の看護実践現場で実感しています。そして臨床判断の言語化には、自分がどのような臨床判断に基づいて看護実践を行ったのかを、立ち止まって考える必要があります。

今回の大会テーマは「いま改めて看護師の仕事を発信しよう～看護師の臨床判断を伝える 生活者に、他（多

職者に、地域に～）」であり、普段自分がどのような臨床判断に基づいて看護実践をしているのか、改めて考える良い機会となりました。私は外来に所属しており、病を抱え治療を受けながら生活している患者さんと接しています。そのなかで、「生活者」である患者さん一人ひとりが、地域で自分らしく生活できるように看護には何ができるのか、日々考え実践しています。今回のシンポジ

ウム、臨床から在宅へ「臨床判断をつなぐ」を聞き、立場の異なる看護師の臨床判断をつなぎ合わせることで、外来という限られた時間であっても、患者さんのニーズに合わせた看護実践につながると感じました。それは、病院と地域だけでなく、施設内においても同様です。私たち看護師は、自分がどのような臨床判断をもとに看護

を実践したのかに加えて、その結果患者さんがどうなったのか、看護の成果を含めて語る場が必要だと改めて感じました。看護師の臨床判断を伝え、つなぐことで、患者さんが自分らしく過ごせるための看護支援につなげていきたいと思えます。

国際交流委員会からのお知らせ

国際交流委員会 委員長 曾田 陽子 (愛知県立大学)

2023年6月14-17日にNANDA International 50th Conference: Shaping, informing, and Communicating Nursing and the Human Experienceが、アメリカ合衆国マサチューセッツ州のボストンカレッジで開催されました。日本からは5名が参加され、内2名(いずれも日本看護診断学会会員)はポスターセッションにおいて研究成果を発表されました。ACENDIOのワークショップは2024年4月25日にノルウエーのオスロで開催されます。詳細はACENDIOのホームページをご覧ください。

会員ニーズ調査において、国際交流委員会へのご意見を有難うございました。皆様のご要望にこたえられるよう委員3名で地道に取り組んで参りますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

日本看護診断学会研究助成のお知らせ

研究助成選考委員会 委員長 長家 智子 (第一薬科大学)

日本看護診断学会には、日本における看護診断を発展させ、看護の質の向上を図ることを目的とした「研究助成制度」があり、50万円を上限として研究費を助成しています。申請手続きは、日本看護診断学会ホームページの(<http://jsnd.umin.jp/>)、委員会のサイドバーから「研究助成選考委員会」のページをご確認の上、掲載している「研究助成申請書」「研究経費支出計画書」を作成し、日本看護診断学会事務局に送ってください。申請する研究は、看護実践において普段取り組んでいることで、看護診断だけでなく看護過程・臨床判断など幅広い分野で募集します。

助成を受けた場合、研究成果を日本看護診断学会学術集大会で発表して頂くとともに、学術誌へ投稿して頂くこととなります。これは、他施設の看護の質の向上も図っていくという研究成果による社会貢献を目的としています。2024年度の申請締め切りは、2024年11月末です。皆様からの応募をお待ちしています。

論文を募集しています！

編集委員会 委員長 黒田 裕子 (湘南鎌倉医療大学大学院)

編集委員会では、看護診断および看護過程や看護アセスメント等に関連する未発表の原著、総説、研究報告、実践報告、事例報告、資料の論文を随時、募集しています。提出期限は毎年10月末となっております。会誌『看護診断』は、2022年3月より電子投稿となっております。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

看護実践の貴重な資源となりうる論文の投稿を心よりお待ちしております。

入会のご案内

本学会は適切な看護を行うために看護診断に関する研究・開発・検証・普及並びに会員相互の交流を推進し、同時に看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって看護の進歩向上に貢献することを目的としています。是非、多くの方々のご入会をお待ちいたしております。ご入会に関しましては私共のホームページ(<http://jsnd.umin.jp/>)入会申し込みよりオンラインにてお申込みくださいますようお願い申し上げます。

入会手続きに関するご不明点は 日本看護診断学会事務局

TEL:03-3352-6223 E-mail:jsnd@convention-access.comまでご連絡お願いいたします。

日本看護診断学会ニュースレター 第26号

発行日 2023年11月1日

編集委員/黒田裕子、明石恵子、福田和明、古川秀敏、和田美也子、山田紋子

